

しかも、小さなアイヌコタンを形成して、原始的な生活を営んだ漁獵民族だから、木材を消費することは極めて少なかったし、たゞ西南部の海岸沿いに点在していたごく少数の和人が、必要に応じて、僅かに自家用の建築材・造船材ならびに薪炭材を、自由に伐採、使用していたに過ぎない。旧記によると、寛政十二年アポイの五葉松で千五百積他十余隻の大船を建造したと言われるが、ともかく本道に和人が本格的に移住して、村落が形成され、発展して、生産技術が高度化するまでは、原始の姿を殆んど変えなかったのである。

2 日高の山野

日高の山野の情況は次のように旧記に誌されているので、開発以前の日高の森林景観がほぼ想像できる。

「河畔の原野には楡・松・赤楊・槭・柳・白楊・桂・胡桃・ドスナラの類が生長し、下草の劉寄奴・欽冬（ふきの別名）蕁麻・蓬・クサソテツ等が繁茂し、湿地には殊に蘆とヤチボウズの繁殖するを見る。然れども河畔の樹草は開墾の進歩に従い著しく減少せり。丘陵・高原中海岸に近き所は概ね地味不良で樺最も多く、海岸を遠ざかるに従って樺多し、その他槭・アサダ・赤楊・刺楸（落葉）樺等を交う。根松は国の西部に於ては海岸より数里の奥に入らざれば之を見る能はず。奥に入るに従い漸くその数を増す。東部に至るに従いて漸次海岸に近づき、冬島官林は海岸より常緑樹の鬱蒼たる森林をなせり、栗は国の西部に産し、山椒は諸所に生ず、此の二種は十勝国以東になき所なり。下草は丘陵・高原には笹・萩・茅・蕨・カラマツソウ等多く、山岳には笹繁茂す。海岸の砂地には処々玫瑰の美化を開くあり。

而して日高に於ける植物の季節は大畧左の如し、野草の萌芽（四月上旬）、潤葉樹の萌芽（五月中旬）

原野・山林の青色を呈する（五月下旬）

野草の最も盛んに生長する期節（六月中旬）

楓の紅葉を催する（九月中旬）、全山紅葉（十月下旬）

潤葉樹の落葉（十一月上旬）

七 交易のしくみ

1 請負制と直捌の制

前松前藩政期における場所の交易は、寛文期の調べによると、当時の蝦夷地の交易品として東蝦夷地は干鮭・開き鮭・塩引鮭などが主なるものであった。そして日高ではアイヌと昆布の交易がはじめられている。

当時場所に運上屋（交易所）が置かれ、アイヌとの交易を行ったが、場所請負人のこととは暴利をむきぼり、アイヌに対する圧迫は一層募って運上屋の不正交易やアイヌ虐待は次第に表面化していったが、しかし日高の請負人は他地方の如く苛酷な者はなかったようである。

前幕政期に入ると、幕府の施政方針として各場所とも直捌の制に切換え、官吏をして監理させることを指示したので、これに基づき寛政十一年に運上屋を会所と改称、一時場所請負人を廃止し、温情主義をもって幕府の役人が直接場所の仕事を担当しアイヌに対処することになった。このことは、北辺防備上アイヌの協力を必要とした懷柔策であると同時に、請負人のアイヌとの交易法に対する宿弊を一掃しようとした決断であった。

こうして直捌によって一応目的を達したものの、幕府は経済政策上やはり場所は広く民業に委ねることが得策であることをさとり、文化十年再び東蝦夷地各場所は請負制となった。しかも東蝦夷地の各場所は松前商人が過半を占めるに至った。

なお寛政十二年、直捌の制に伴う当時の仕入品や、産物・運輸の關係から幕府は海上運輸に重点を置き、船舶の建造に乗り出した。様似川口に官営造船所を設置して官船数隻を建造せしめた。当時様似で造られた船には、飛竜丸（一、四〇〇石積）翔鳳丸（一、五〇〇石積）済通丸（六〇〇石積）鳴鶴丸（六〇〇石積）などがある。

古文獻に寛政十二年幕府は日高幌満に造船所を設け、アポイ岳の五葉松を用材として一、五〇〇石積は十余隻の大船を建造した。この船は官船で赤船と称した。官船の総船頭は高田屋嘉兵衛であると見えている。

この頃の場所積取運賃は箱館を基点として、沙流より三石まで百石に付金十二両、浦河より幌泉まで百石に付金十三両となっている。

なお、当時代日高には殆んど製造と称するに足るべきものがなかったが、報文に僅かに次のことが誌されている。

塩 寛政十二年様似場所に於て海水を煮て塩を試製せしことあり、其の地今なおシホガマと称す。
酒 文化年間、様似会所に酒造蔵ありしを見れば当國釀酒の起源は甚だ古しと雖もその業毫も発達せず。と

後松前藩政期、文政四年（一八二二）十四代松前章広の時蝦夷地は再び藩の所領となり日高の各場所は松前藩に復したが、この期

は見るべき業績もなく人心は振わずむしろ後退の感を深くした。しかも場所請負人等は監督の弛緩に刺じて力を振り、アイヌへの圧とも概ね漁獲が少なく不振を極めた。工業面について塩の試製は既述したが、この期の安政年間に浦河場所内、元浦河・向別・幌別においてこれを試製したことがあるという程度に止まる。（報文）

安政二年箱館奉行所が治めることとなり、後幕政期に入る。この期は奉行の経営策は時宜に適し、かつ函館の開港に伴いその商業施策またよろしきを得た。こうして北海道開拓の基盤を固めるため精魂を傾けた。

特に箱館の文那向昆布の輸出は激増し、日本昆布の声価を高めたが、日高三石昆布、幌泉産昆布が大きくその役割を果たしたのである。

2 場所の産物

安政六年東蝦夷地、日高各場所の産物

サ ル 昆布・鮑・鱈・鮓・樺縄・鮫・鮫油・雑魚粕・イリコ・鰯粕・鹿皮
ニイカッブ 昆布・塩鮭・干鮭・イリコ・干鮑・干鱈・干鰯・鰯粕
ミツイシ 干鮭・塩引鮭・昆布・イリコ・干鮑・干鱈・干鮫・鹿皮・鰯粕・魚油
シツナイ 昆布・アタツ・干鮭・フノリ・鮫・干鮑・イリコ・秋味鮭
ウラカワ 昆布・干鮑・イリコ・鮫・干鮭・塩鮭・干鮑
シヤマニ 昆布・魚油・フノリ・塩鮭・干鮑・鰯粕・鰯粕・筋子・干鮭・鹿角・鹿皮・イリコ
ホロイツミ 昆布・干鮑・雑魚粕・鮓粕・チカメ粕・フノリ・干鮑・鮫・魚油・鰯粕

八 地下資源

1 日高の地質

北海道の構造岩石は次の七種の何れかに所屬している。以下地質と鉱床との關係について述べる。

第一・三波川系 第二・古生統

第三・中生統白堊系 第四・第三紀層

第五・第四紀層 第六・古火成岩 第七・火山岩

北海道の大半は第三紀層で次いで火山岩・古生統・中生統等である。石狩平野と根室の西北部は殆んど第四紀層が占めている。

花崗石は日高山脈の中央を貫いて南北に走っている他所々に点在している。三波川系は僅かに露出しているのを見ただけでいまだに探究は行き届いていない。これらの諸岩配置の形状を観察すると、本島東部においては古生統がその基盤岩をなして南は襟裳岬から日高山脈を組み立てて隠巖起伏して北方に走り、北見の江刺（枝幸）に達して南北におよぶ中軸をなしている。

また、日高山脈においては、この岩石の中軸に沿うて花崗岩が噴出して、その両側の岩石を變質させ接合帯を造り出している。

また、天塩川の上流および北見のチカブトムシ近傍においても同じように花崗石が所々に噴出して古生統の岩石を變質させている。中生層はこの古層軸の西側に沿うて北は宗谷岬から南は浦河近傍まで南北に走って一帯をなしているが、また所々に点在している。

また、第三紀層及び第四紀層はこの古層軸の東西両側にならんでおり、非常に広大な地積を占めている。（以下略）

第一・三波川系

角閃岩・緑泥片岩・多色珪岩・緑簾岩・千板岩・白點角閃岩の六種の岩石から成り立っているけれども、日高三石川下流に一の小さい露出があるだけで、その他に鶴川・沙流及びケリマツツ等の諸川および天塩川の支流トイカムベツとパンケナイ等においては僅かに流石を認めただけであるから、もちろんその位置や広さ・鉱床が存在しているかどうかを知ることができない。しかしこの岩石は北海道最古の岩石であって、四国伊予の別子銅山等を組み立てているものと同じであるから今後望みをかけて極力探究する必要がある。

第二・古生統

岩石は三株系、古生統水成岩・古生統接合帯の三種にわけている。

三株系は輝緑岩・藍閃岩・千枚岩・硅片岩・結晶灰岩・蛇紋岩の六種からなり、日高様似山道および三石川下流にその痕跡が存在している。

古生統水成岩は砂岩・粘板岩・石灰岩・シャルスタイン・珪岩・角岩・アデノール・變岩角閃岩・千枚岩の十種よりなつて居り、襟裳岬から南北に走つて東部の基石をなし……………^(略)

北海道においてこの岩石の中にある有用な金石は松前郡赤神の銀鉛鉱、久遠郡土古丹の黒鉛および各地の石灰岩・粘板岩および輝緑岩である。しかも、内地においては、古生統の岩石中に鉱脈を蔵するものが甚だ多い……………^(略)

それだけに日高山脈においてもやや精密な探鉱がなされたというが、その多くは硫化鉄薄脈のみでいまだに有価なものは発見されていない。しかしこの岩石は本道の内部の人跡甚だ稀な地を占めているものが多いから今後において富鉄の発見の望みがあるとされている。

調査によるとこの岩石中に最も有望なものは石灰岩である。

古生統接合帯は、古生層接合帯と片状火成岩の二つにわけている。前者は雲母粘板岩・雲母片岩・雲母硅岩・ホーンフェルス・角閃岩・結晶石灰岩の六種からできており、後者は片状花崗岩・片状緑岩・片状斑輝緑岩の三種からできている。

これらの諸岩はみな古生統の岩石か、さもなければ花崗岩噴出の際にその熱を受けて変質したものであるから、その占領の地は必ず古生統と花崗岩の相接触している所にある。それ故東部日高山脈においては中央を貫き南北に走っている花崗岩の両側に沿うて帯状をなし……………露出している。(以下略)

第三・中生統白堊系

頁岩・砂岩および蜜岩の三種から成り立っており、北海道の東部を南北に貫いている古層中軸の西側に沿うて、北は宗谷岬から南は浦河の間に点々と整列している……………日高新冠川上流「シブチャリ」川上流及び浦河等に小さな露出があつて、これらの層の中には化石を産することが頗る多い……………^(略)

第四・第三紀層

頁岩・砂岩・凝灰岩・蜜岩および稜蜜岩・炭層・硅藻土の五種より成り立ち、その播布の区域は最も広潤であつて、本道の鉱物中最も重要な位置を占める豊富な炭層を有するばかりでなく火山岩に接した凝灰岩の中には貴重な金属鉱脈を蔵している。また将来応用の広い硅藻土の厚層および石灰・硫黄に次いで最も有望な石油および褐炭などはみなこの三紀層に所属している。しかもこの層の中には化石の産出が最も多い……………(以下略)

第五・第四紀層

砂・ローム・粘土・礫・火山噴出物の五種からなり、大小河流の沿岸および海岸に堆積して耕土の基土となつて……………^(略)

第四紀層の中にある経済上有用の金石は、砂鉄・砂金・沼鉄鉱及び粘土・泥炭であつて、瑪瑙・満俺なども亦河流の礫積中に混流しているものがあるが、その源は第三紀凝灰岩中にある。

第六・火成岩

花崗岩・緑岩および玢岩・斑輝岩および斑輝緑岩・輝緑岩・蛇紋岩等がある。なかでもやや大きな露出を見せているのはただ花崗岩のみである。その他は僅かに小さい露出に過ぎない。その最大なるものに東部にあつては日高山脈の中央を構成し……………(以下略)

第七・火山岩

安山岩・真珠岩・松香岩・黒曜岩・軽石・流紋岩の六種から成り立っており、北海道においては第三紀層に次いで頗る広潤の地を占めている。主要な山脈の峻嶺は概ねこの岩石より出来ている。東部においては千島帯山脈を組立て、また東北山脈の大半はこの岩石である……………(以下略)

(北海道鉱床調査報文準換)

なお、日高の地質について殖民状況報文にも次のように誌されている。

「当国地質の構造は本道諸国中最も整正にして、各種の岩石順を追て配置せらる。

即ち日高山脈は花崗岩噴出してその骨髄をなし、古生層は花崗岩の周縁を包みて露出し、その両岩相接したる所に花崗岩の作用に因て接合岩を生ず。中世層は古生層に次て処々に散在露出し、殊に浦河附近に於ては海岸に露われて種々の化石を出し、第三紀層は又古生層中世層に接して海岸に至る迄の地を占領し、第四紀層は各河川の沿岸に生して低原をなせり。而して西境より浦河に至る地

方は一般に火山灰を以て被覆せられ、地味を瘠悪ならしめたるは輕視すべからざる事実なり」と、
2 採金の夢

蝦夷地の鉱業は、江戸時代初期より採取された砂金がその最初であろうが、すでに幕府は蝦夷地の金鉱に着眼して、慶長九年（一六〇四）に松前藩に対し金山管理を一任している事実がある。

元和二年（一六一六）前後より砂金の採掘は急速に發展し、元和三年には松前の東・大沢・ソッコで良質の砂金が採取され、元和六年に松前藩は冶金百塊を幕府に献上したという。こうして約半世紀間は極めて盛んなものであった。

ジェロラモ・デ・アンジェリスは蝦夷地を最初に訪れた西歐人でイエズス会の神父であった。彼は元和四年（二代秀忠の時）十月一日付で第一次の蝦夷報告書を認め本國に伝えているが、その中に次の一節がある。

「蝦夷に多数の金鉱山があるが、彼等（アイヌ）はそれを採掘しない。漸く二年前から松前殿が鉱山を開いたばかりである。私はその金を見たが、極めて純良であった。日本（本州）の金のように微粒の砂金ではなく、最も小さいものでも一分ぐらいある。彼らは重量一六〇匁の大金塊を発見したことさえある。それらの金山は、まるで金そのもので出来ているかのように、多くの金を産出するおそろしくこの報告は、大きな憧憬をよんで当時蝦夷地への限りない夢を見させたに違いない。

けれども寛永年間をピークに砂金源は乱採取のため急速に枯渇していった。

日高に和人の入った年代は詳らかではないが、寛永年間はやはり日高も砂金採取の全盛を極めた。即ち寛永九年に沙流に金山を開いたことが旧記に見えている。そしてこの頃から日高の各地に砂金が発見され、年々数多くの坑夫が来て採取が続けられていった。寛永十年（一六三三）には金山奉行が置かれ東蝦夷地ケノマイ（現在、清島）の砂金が採掘され、また染退川奥地には陸奥の人が金山を開き、この年から寛文九年（一六六九）まで採取が続けられた。

このことは開拓使事業報告第三編に

「按ずるに寛永十年松前藩東部猿留及び染退金山を検し同十二年始めて十勝・連山両所に採金の業を開く」とある。

寛永十二年には様似村運別（現在のうんべ）に採金の業が幕府によって開かれ、いらい寛文九年のシャクシャインの大乱まで東金山として活況を呈したが、この乱を契機としてその坑口は隠されてしまったためその後長くその所在を人々は知らなかったという。

ここ東金山（金山は砂金）でキリスト教徒児玉喜左衛門とその一味が坑夫になって潜伏していたが、運別川口のキリシタナイ附近で正保元年（一六四四）捕われの身となり江戸に送られたという物語がある。

浦河町野深村の元浦川上流字ヒトチの溪間にカネカルウシと称するところがあるが、ここは寛文年間盛んに砂金を採掘した所と言われている。

さて寛文八年（一六六八）夏、染退の酋長シャクシャインの乱が起った。初めシャクシャインの勢威はまことに強大で彼は不軌の心を懷いていた。たまたまその地の坑首の莊太夫（庄太夫、秋田の浪士）なるものが彼の女婿となると、松前を滅して夷地の利を自分の思うままにしようとして、シャクシャインをそのかし叛旗をひるがえさせたが、その時波恵の酋長オニビシは甚だ勇敢でこれに従はなかったため、シャクシャインは彼を襲ってこれを殺し、さらに寛文九年（一六六九）松前より来た商估や入稼人二百七十余人を殺害し、勢の赴くところついに国縫（胆振国）に進出した。

ために松前泰店は救命を奉じ迎撃してこれを破り、シャクシャインをだましてこれを殺したが、和人（採金坑夫）がこの乱に介在していたため事態を悪化させたことは否定できない。

従つてこの蝦夷の乱を画期として坑夫の東蝦夷地に入ることを禁じたので、日高各地の鉱場は急速に衰え一攫千金の夢を見る山師の姿はもはや見られなくなった。

しかも北海道のこの種の鉱業は、その後北見枝幸の砂金ブームを見るまでは全く新しい動きを見せなかった。ただ元文（一七三六―一七四〇）の世の小判改鑄に際して金座の後藤庄三郎が幕府の許しをえて板倉源次郎に蝦夷地の探鉱を行わせており、明和（一七六四―一七七二）の世にも同様の企てがあった。

さらに天明年間（一七八一―一七八八）において幕府は行詰る財政打開の方策として蝦夷地調査を企てているが、いづれも蝦夷地の砂金の開発に大きく関心を寄せていたことがわかる。

殖民状況報文は日高鉱業の来歴について、「寛文九年松前藩沙流の金山を開く、その後染退・元浦川・幌別・新冠諸川の沿岸に砂金を発見し年々坑夫数百人入稼をなす。

その税は一人に付一ヶ月砂金一匁にして収益少なからざりしが、寛文八年（一六六八）シャクシャインの乱後坑夫の東蝦夷地に入るを禁じ各所の鉱場皆死す。

享保六年（一七二二）染退より砂金を出せしこと旧記に見えたと雖に採集の業営まざりしならん。

寛政十一年（一七九九）幕府又委員を派し染退の銀山を試掘す、その結果詳ならず」と、

いづれにしても、本道には各種各様の地下資源が豊富に埋存していると言われるが、未開発・未調査の地域が多い。
ちなみに北海道の地質区は次の三つに大別されている。即ち西南部（石狩低地帯以南の道南部）、中央部、東部（北部と南部に分れ、前者は北見地域後者は十勝・釧路地域）である。日高は中央部に所属する。その地質と鉱床の關係については既に述べた通りであつて、日高は未知の地下資源の埋存の可能性の大きい地域とされているだけにその開発が望まれる。

九 海沿い河沿いの道

砂浜づたいと山道開削

それは今から何年前でどんな人種か明らかでないが、大昔の人々は脆弱な小舟や筏をあやつりながら命がけで日高の海辺にたどりついた。途中にして難波、貴い人命がいくらそこなわれたかわからないことであらう。

たどりついたその人達は思い思いに砂浜づたいに海に注ぐ大小の河川を探し求めて附近の台地に堅穴という住居を築出した。

彼等は獲物によって終始移動を繰り返したであらうが、甲地から乙地に、乙地から丙地への移動にあたり、時には海に迫る岩山林をくぐりぬけるとその踏草をたどった人々によって、自然に通路ができたであらうが、それは海岸に近い極めてせまい範囲内にとどまったものであらう。未開の無気味な天地に漂う恐怖に道を開くことは命がけのものであつたに違いない。

アイヌ達の部落の生活がはじまると河沿いに道が次第に上流へとさかのぼり奥深くひらかれてゆき、海沿いにも道が開かれていたが、砂浜は自然のままの荒漠とした交通路であつた。

古い文献に「砂浜づたいに往く」と伝えているがまぎまぎと昔が憶ばれる。

砂浜がつきて巨岩が海中に突出して山が迫り通路がはばまれる、いわゆる難所は迂回の山道を考えなければならなかつた。しかし開削は思いもよらぬことであつた。

河川を渡るにも大川は渡し舟を用い、小川は浅瀬を選んで渡つたろうし狭い川幅には丸太木を渡したであらう。大雨の日には思いもよらず、水がれの日を選んだらう。

明治二十二年の北海道殖民状況報文に、日高の海岸について次のように誌されている。

「海岸線ハ四十四里十五丁ニシテ其大部ハ狭キ砂浜連続シ其上ニ海成段階ヲ負フ段階ノ崖端ハ傾斜概ネ急ニシテ雜草ヲ以テ掩ハレ又屢々絶壁ノ峭立スルニ達フ様似郡冬島ト幌満トノ間及ビ幌泉郡庶野ト猿留トノ間ハ巖石礫磊最モ危険ニシテ古来著名ノ難所タリ河川ノ近傍ハ大抵砂丘ヲ生ジ殊ニ浦河郡エイ川口ニ於テハ其高三千尺ニ達スト雖モ亦甚タ長ク連続セズ、右ノ如ク当国海岸ノ大部ハ狭キ砂浜ヲ通スト雖モ海中ニハ処々岩礁散在シ殊ニ東部ハ之レニ富ミ能ク昆布ヲ饒産ス……」

これによって往昔の地理を知りその状況を推測しうるのであらう。

日高に和人が次第に入り込むようになったのは三百五十年前の昔のことと、採金の業が開かれるようになってからである。

こうなると自然の交通路は次第に利用されてこれが道路化されていったし、またこれらの人によって通路は次第にできていった。

寛政元年（一七八九）すでに馬は舟でムロランに送られそこから様似までの運搬に使われている。見なれぬ動物にアイヌは恐れて逃げ廻つたといわれる。

歴史をたどると道路の開削は寛政十年にはじまっている。即ちロシアの蝦夷地入り調査の為幕吏大河内善兵衛政寿が東蝦夷地巡回の際、様似に足跡をとどめこの年様似山道を開いた。

寛政十一年正月、東蝦夷地が幕府の直轄となつた際大河内善兵衛外四名が統治の任に當っている。そして幕府は施政方針として六項を指示しているがその中に「蝦夷地は来往不便であるから道路を開き旅行の便を図る事」と見えているが、彼はその前年すでに道路の開削に當つたわけである。

なお十年に大河内に随行した近藤重蔵が様似に來り進んで国後、択捉を探索した後江戸への帰途、従者下野源助（水戸の漢学者、本名木村謙次）に指揮させアイヌを警備役として様似に通ずる約三里の山道とピタヌンケブより広尾に至る山道を開削している。これが北海道最初の道路づくりだとされている。

そして碑を建てそれに左の如き覺を刻してこの道の保全を通行者に望んだ。

おぼへ

このみちは、はまとほり、トモチクシならびにピンナイとうのなんしよありて、わうらいのものなんぎすべきによりて、このたび、あらたに、きりひらきたるあいだ、このちわうらいのもの、ひとえだのき、いっぽんのよしなりとも、きりすがして、ながく、わうらいのためをこころがくべきものなり。